

豊凶を神矢で占う弓始式

吉川章一



神事開始前の標的と神饌

春日神社では毎年一月十日、はりまじ貼的という略称で呼ばれている弓始式が行われる。

この神事を一口でいえば、その年の恵方にあたる方向に紙で作られた的に神矢を放って、五穀の豊凶を占う行事である。この神事は、第二次世界大戦中も絶えることなく行われてきた。起源については、宮座が保管している古文書や、古老などについて調べてみたが遂に解明できなかった。しかし、相当古くから、行われていたと思われることは、あとで述べるなおらい直会の食事作法からもうかがうことができる。

またこの神事は、氏子の中から自然発生的に生まれたのではないかと思われる。そのことは、この神事は他に類例のない春日神社独特の神事であって、歴史的な史実の出来事とその背景にあつたり（たとえば、祝園神社



禱俵

の居籠祭)、各神社共通の新年祭等の形式にとらわれていないことがあげられる。神事そのものは小規模であつて近隣近郷から多くの人が見物にくる観光的なものでなく、氏神に対する村人達の素朴な信仰心の一つの表現とみるべきであろう。またそのことは、神事は宮座が中心となつてすべてを取り仕切つていて、宮司が参画していないことである。もつとも当神社には、古くより主掌する宮司がなくて他神社の宮司の兼務で祭祀が行われているが、そのことも一因であるかも知れない。

それでは、神事とそれに関連する行事などについて、順次述べることにする。

春日神社には、四つ宮座があつて、角力という四本柱の役割で神社のすべてを支えていたが、現在では、その中の一座が欠けて三座となつていて、三十六人衆といわれた大夫(注一)は三十名を割つている。宮座の中、伝統も古く座子の数も多いのが真座であつて、あとの二つは本座と今座で真座とのバランスを取る必要上、行事などは、一つの形をとり真座と事実上二つの宮座を形成している。

弓始式の神事を述べる前に、当日氏子が持参して社参する禱俵(注二)の説明から始めることにしたい。真座の場合は禱俵を作る当屋(注三)は年末まで、収穫したその年の稲藁を陰干して鮮度を損なわないように保管



標的に向かって弓を引く宮守

しておき、年が開けるとその稲藁で禱儀づくりを始める。先づ藁を一握りの太きにして、根元より一定の間隔をおいて五力所をそれぞれ一本の藁をひもにしてしぼる。次に残った穂先を五つに割ってそれぞれ括つて出来る。五つしぼったりすることは、五穀を表現していて、出来上った禱儀は何故か椿の葉を一枚さしこんで、弓始式の行われる二、三日前までに座子の全戸に配布する。本座、今座も大体同様な方法である。配布をうけた座子（氏子）は一月十日の朝その禱儀に紙包に入れた供米を添付して社参し、拜殿の一隅にならべておく。

弓始式の神饌は、蒸米一升を高盛りして上を藁でまいて一体、神酒一升一体、鯖一匹で一体、里芋をT字をさかさまにした形の竹に突き刺して一体の計四体である。この神饌は宮座毎に分担して持参する。

標的は半紙十二枚を正方形に近い形でならべた大きさのものを青竹を割ってつくり、半紙を貼る。的の中央には大きく二重丸を墨で画がき、中の丸は塗りつぶす。的の位置は当日の朝、恵方を確認してその方向に立てるのであるが、先づ竹竿立てを樹木などを利用してつくり、竹竿には、社殿で使用している菰を吊るす。この菰は標的を突きぬけた矢の力を押さえる役目をする。危険防止の為でもある。この矢による事故は古来皆無である。的をこの菰に取りつけて準備完了ということになる。



禱俵と標的解体作業

標的から一定距離、十数メートルのところに標的と向かいあつて神饌台を置き、先に述べた神饌を共進する。この神事の主役は宮守（注四）で、浄衣に身をつつんだ二名の宮守は、神殿にぬかづいて神事の無事と五穀の豊穰を祈願したあと、神饌の前で標的に向かつて拝礼、神事の開始を告げる。次に神饌を撤し、その位置から弓に矢をつがえて、的に向かつて放つ。的の中心に矢が多く当たった年は豊作といわれる。宮守がそれぞれ

十本の矢を射て、神事は終わることになるが、そのあと参列の大夫の希望者が交代で射ることを許される。距離が近いので、百発百中といったところであるが、平素弓矢を持ったことのない者ばかりであるから、思うように当たらない。うまく中心に当たれば歓声があがり、当たらずに飛び去ったりすると笑聲が湧くなど、なごやかな競射場風景でもある。

神事が終わると、標的は参列の大夫の手によつて解体され、的の竹組で小さな串を作り、その串には的紙を小さくちぎつて差し込み、禱俵につけられている供米の紙包みと交換する形で取り付けられる。昔は少しでも黒の部分の多い的紙のさし込まれている禱俵を手にしうとしてもみ合う風景がみられたとか、黒の多い的紙のある禱俵を手に入れば、豊作に恵まれると信ぜられていた。従つて持ちかえつた禱俵は神札扱いで家の玄関の上など高いところに置かれて保存される。



神饌の鯖と里芋を炭火で焼く

神事のあとは直会となり、関係者に神酒などもてなしのあるのは常識であるが、このあとの直会は一寸変わっている。神饌は全部そのまま原始的な方法で調理されて供される。つまり、鯖と里芋は炭火などで焼かれ、これも的に使った竹を使用して包丁代わりに参列者の数に見合うようこまかくする。また、食器の代わりは半紙である。

直会会場に着席した各人の前におかれた二つ折りの半紙の皿に、包丁代わりに使った竹を箸にして、蒸米、焼鯖、焼芋を取る。全員が取り終わると神酒が出されて宴に入るのであるが、箸を使用しないで手づかみで口にする。縄文時代をしのばせる食事作法が、そのまま続けられていること何となく歴史の重みを感じられる。そのいわれは、残念ながらわからない。この神事が始められた頃は、草深い田舎のこととて、手で食べる習慣がまだ一部の処では残っていた為であろうか。ちなみに、春日神社は大同二年

(八〇七)に春日大社の御分身を移して氏神としたと伝えられているが、事実とすれば、千百八十余年の社歴を有する神社である。

弓始式の神事と行事はこれですべて終わったことになるが、ところで氏子が持ち帰った禱儀は、そのまま家におかれたままになっているのだろうか……。いやこの神事にはあとがある。五月になると農家は一斉に苗代を作り種粃を蒔く。この頃になると家で保



半紙の皿から手づかみで食べる直会

管されている禱儀の出番がくる。苗代に種を蒔いた後は、発芽を促進するため、水を湛えておく。大切なのは発芽して苗が青くなるまでの水の管理である。苗代は水の掛け引きにもっとも、便利のよいところということで、小川つまり水路のそばの田が選ばれる。水を田に入れるために畦の一部が切り取られているところを水戸口という。禱儀はその水戸口に弓形にして固定して置いておく。発芽前に苗代に泥水が侵入すると、苗床の表面に泥の幕をつくる恐れがある。もしそのような状態になると、籾種の発芽は不可能となる。農家における種籾は生命の次に大切なものの一つであって、そのようなことになったら取り返しがつかないということで、この泥水防止手段として禱儀を使うのである。さてそれでは、このことがどのような効果があるかといえば、水戸口から侵入してきた泥水は、禱儀にせき止められて滞留し泥が沈下する。当然苗代へは泥のうすくなった水が流入し、被害を与えないということになる。最近のようにコンクリート等で整備された水路をみるとこのような事は、起こり得ないと考えがちだが、昔の水路は不完全で、雨が降ると野道の路面を洗った泥が、何時の間にか苗代へ流入して、あわてて雨の中を泥の排除に大膽な農家の姿をよく見かけたものである。この禱儀が果たしてどの程度泥除けの効果があつたかどうかは別にして、信仰を苗の成育に応用した試みとして興味深いものがある。

また言葉をかえるならば、氏神は村人にとっては、日常の農耕と密着した極めて身近な存在として、朝に祈り夕べに感謝する明け暮れの中心であったことの證左ではないだろうか。昨今田植も機械化されて、苗代の作り方も大きく変わり、禱儀を水戸口へ置く必要がなくなつたものの、それでも禱儀は苗代へ持参し、水戸口の近くへ花を添えて飾り、健全な育苗を祈る風習はつづけられている。

時代と共に食生活も変わり学童の給食もパンが主体であり、日本独特の清酒さえ米で作られなくなり、米の消費は年々減少して、水稻の作付制限が強制されるようになったにもかかわらず、外国の安い米を買えという論議が盛んな近頃の世相である。しかし、日本の国土が育んだ米が血となり肉となつて今日の日本人を作り上げたことに思いを致す時、安から外国の米に代えたらいいという考えには賛成できない。外米にも味のいいのがあるからといつても、食べている中にあきらめてくることは目に見えている。

草深い田舎の氏神の神事である、弓始式の中心をなす禱儀にこめられた農民の、米づくりに対する熱い願い。それはくる年も豊作でありたいという欲深い望みを禱儀に托しているのではなくて、自分の分身のような気持で作っている米作りの姿をかいまみたような気がする。また、このような遠い祖先からの米作りに対する情熱と禱りをあらためて身にしてみて感ずるのである。

本文をまとめるに当たり、古老一宮權一氏より貴重な助言を頂いたことを付記する。

(注一) 大夫とは宮座の座子を代表して神明に奉仕する人のことをいう。宮座毎に選任の方法は異なるも、近年は年齢順につとめることとされており任期なし。

(注二) 禱俵という漢字が正しいかどうかについては疑問が残るも、古来五穀の容器として藁製の俵が一般的で、五穀の豊穰を禱る思いをその俵にこめ「とうびょう」と名付け、稲藁を用いて五穀を表現する形を作ったものといわれる。

(注三) 当屋とは、真座では長子が生まれると座子入りと称し、座の長老に届け登録する。その後その子がある程度成長した時点で、当屋ということで弓始式の禱俵を作る順番が廻ってくる。

(注四) 宮守とは神官でいえば、禊宜に準ずる役割をする者で、宮座の大夫の中から交代で毎年二名がこれに当たり、祭祀では宮司を補佐し、一年間社殿境内を管理する任を負う。